外部評価を終えて

2022年10月12日

第四期外部評価委員：原田園子、中野孝幸、辻 洋、由本陽子

大学各組織の2021年度における諸活動の自己点検・評価活動に対する評価をいたしました。各組織に関する大学全体の評価活動への外部評価委員による評価結果は活動計画評価報告書（A表及びB表）に記載しております。

全体的に各組織の活動は、PDCAサイクルにのっており、概ね適切な自己点検・評価活動がなされています。また、今回の報告書の記述は概ね丁寧な記述がなされているように思いました。

しかし、判断するための情報量が不足していると思われるところが散見されました。根拠資料が欠けていたり、あるいは適切なものが示されていないところがありました。また、同じ学部内の学科間で、記入内容、提示する根拠資料において、統一感がないところが今回もみられました。

また、評価項目内の評価視点で挙げられていることが点検・評価の対象に取り上げられていないところもありました。

今後、上記の点を学内でよく確認されますようよろしくお願い致します。

以下に、外部評価委員共通の感想・意見・提案を示させていただきます。今後の教育研究活動等のご参考になれば幸いです。

1. 2021年度は、コロナ禍での教育研究、指導、支援体制も二年目になり、その手法も普及して、より効果的な、学生のニーズに応える有り方が定着してきているように思います。
2. 先日ご報告をいただいた改組案では、文学部と人間科学部内の学科を分離する形での新学部設置が構想されております。このことから、従前の目標であった学科間協力が軽視され、個々の学科の自律性を過度に重視する方向にならないかと危惧されます。昨今は、学部学科を超えた教育プログラムの設置などが時流となっておりますので、学生たちの関心をひく、専攻の壁をとり払った教育研究活動、社会貢献活動などの検討も改組案に組み込まれることを検討していただきたいと願います。
3. IT リプレース、Wi-Fi 環境の向上についてですが、現代社会において学生にとっ

てインターネットや IT 技術は必要不可欠な状況になっておりますので、財政問題もありますが重要な投資として優先的に考えられませんか。

4. 広報、对外情報発信は、各種工夫して積極的になって来ていると思います。更に効果性を上げるために、現行の広報施策が誰をターゲットに位置づけているのか、漏れがないのか、適切なのか、長期目線がふさわしいのか、短期目線、現実目線がふさわしいのかなど総点検され、効果測定についてのご検討を提案します。阪急電鉄内の広告はよく目につくキャッチだったと思います。
5. グローバルスタディーズ学科設置についてですが、届出型改組の制約があるので教員サイドの顔ぶれはさほど変わらないと思いますが、大学教授会全体で、その教育指導の考え方を抜本的に変えていただきたいと思います。

多文化、多民族共生、色々な意味での弱者との共生社会の実現を学び、考える学問領域であると理解していますので、視線は地球規模で、キャンパス内での座学は半分、残りは社会の中で実践的、体験的に学び、考え、行動するカリキュラムであって欲しいと思います。キャンパスの中は恵まれています。しかし、関西地域を対象にするだけでも、そこに多様な文化を持った、多様な民族、人種の人々が生活しています。NGO、NPO、国連各組織及びグローバル企業との日常的な交流、学習の場を、大学として形作り、門戸を開き外部に積極的に見せていくことを提案します。
6. 女性学インスティテュートの活動が「女性学」という枠組みには収まらなくなってきたと思います。社会では、ダイバーシティ&インクルージョンがすべての職場・教育の場において重要な課題となっており、「女性学」の名称は時流からは外れていると感じます。2021～2025 年度の中期目標の計画案 4 に“本学における女性学インスティテュートおよびジェンダー教育研究の位置づけ・役割を再考、明確にする”とあり、今年度も多少の検討があったようですが、この組織の位置づけを早急に見直すべき時期に来ているのではないかと考えます。

コロナ禍のためリモート授業と対面授業のハイブリッド体制になり、ハード面とソフト面での投資の必要性に加え、学生数の減少から財政面では厳しい状況下にある現実です。対応策の一つとして学部・学科の改組を検討審議されていますが、時流や、現代の若者達の志向やニーズを鑑みつつも、神戸女学院大学ならではのミッションステートメントに基づいた高等教育機関として教育研究活動を進め、発展していかれまう期しております。